



Title	言語資料としての『西籍慨論』諸本：ジャ・ダの使用傾向と改変
Author(s)	市地, 英
Citation	語文. 2022, 118, p. 28-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95231
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語資料としての『西籍慨論』諸本

——ジャ・ダの使用傾向と改変——

市 地 英

一・はじめに

平田篤胤（一七七六—一八四三）は寛政七（一七九五）年に秋田藩を脱藩し江戸に出た後、文化六（一八〇九）年から古道の講説活動を開始した。その講説を門人等が筆記したとする数々の講本が残されている。『西籍慨論』^{（1）}は、その一つであり、近世後期教養層の講説の口ぶりを伝える口語資料とされる（二を参照）。

篤胤講本は江戸共通語と現代共通語との連続性を検討する重要な資料だが、篤胤講本を資料とした言語研究（木坂一九八八、安道一九九六など）では、『西籍慨論』が調査対象にされないことがある。『西籍慨論』は、近世期に写本・木活字本など異本が流布し、気吹屋からは明治三（一八七〇）年の板本（以下、明治刊本と呼ぶ）^{（2）}まで公式に出版されない。このため、言語資料としてどの本が適切か見当をつけるところから始める必要があり、忌避されるところと考えられる。

ところで、平田国学の受容史研究では『西籍慨論』の異本調査が行われ、近世期に気吹舎により『西籍慨論』の写本（以下、清書本と呼ぶ）^{（3）}が頒布されたことや、木活字本は海賊版だったことが明らかにされる（中川二〇〇五、吉田二〇一二）。こうした研究を参照し、本文の比較を行うことで、言語資料としての位置づけを試みることができる。

そこで、本稿では、『西籍慨論』の自筆稿本『漢学大意』と、清書本・木活字本・明治刊本と流布した本の成立背景を踏まえ、本文の比較をし、資料性を明らかにする。調査では、漢籍国字解の異本において使用差が確認されているジャ・ダに注目し、言語資料としての史的位置づけを目指す。

二・先行研究

まず、篤胤講本を調査資料とした近世後期教養層の言語研究について述べる。

後藤（一九七八）は篤胤講本に表れるデアリマスに着目して、近世後期の講説と現代共通語の連続性を検討している。その中で、篤胤講本の自筆稿本八点の残存を指摘し、一部の自筆稿本と流布本の本文比較結果に触れる。これにより、『出定笑語』の自筆稿本『佛道大意』に講義年が繰り返し書き込まれていることから「同じ演題・内容の講義を同じ講義ノートにより何度か行つて」（p146）いることや、『出定笑語』流布本には講義年の異なる異本があること、『出定笑語』自筆稿本及び講本には「細かい文末の言い廻し等に若干の差異」（p146）がみられ、『悟道辨』（上下、文化八年）とその自筆稿本『悟道談弊』には更にその差が多いことが明らかにされる。ただし、複数の講本におけるデアリマスを見渡すことが主目的の論考であるため、諸本の言語資料としての位置づけは行っていない。

木坂（一九八八a）では近世後期～近代における講述体文章の性格を明らかにする目的で『悟道辨』、『古道大意』（上下、文化一〇年）の文末形式等の調査を行い、講述体の位置づけを行う。安道（一九九六）では篤胤講本におけるジャ・ダ等文末表現について、現代共通語との関連を検証するために取り上げる。⁸ ジャを優勢とするのは『志都能石屋』、『古道大意』、『俗神道大意』、ダを優勢とするのは『歌道大意』、『玉たすき』という、篤胤講本ごとの違いを明らかにする。このうち『歌道大意』は東国出身者による清書であることから、清書段階でのダの混入を指摘する。¹⁰ 木坂（一九八八a）、安道（一九九六）では『西籍慨論』を調査資料に選択し

ない。確実に近世後期に出版された講本を選定したためであろうが、理由の明記はないまま除外されている。

では、『西籍慨論』講本を言語資料として位置づけるために、どのような点に注目すべきか。『唐詩選国字解』（天明二年（一七八二）版など）の異本を調査した浅川（二〇一三）では、口語資料として取り上げられてきた『唐詩選国字解』が宇野東山の『唐詩国字弁』（明和三（一七六六）年刊など）、『唐詩選診解』（明和四年刊など）の本文を増補改訂し、高山房の小林高英が更に手を加えたものと位置付けた。また『唐詩選国字解』では文末がデアル体になる傾向があること、天明二年版ではダだった箇所が寛政三年版ではジャに訂正され、ダの使用が忌避される傾向を指摘する。これは、『唐詩選国字解』に限らない傾向で、編集意図次第で本文の表現に手が加えられることを意味する。

近世後期の江戸における指定表現のジャとダは、文学作品の調査で上流層・教養層がジャを使用し、ダは下層の人々が使用する傾向がみられる一方、ダの使用層の増加が指摘されている。¹² このことから、篤胤講本の時期は、『唐詩選国字解』の時期よりも、ダが共通語としての性格を持つようになっていたと想定される。ただし、明治初期の講本にはジャを専用とするものがあり、¹⁵ ジャが講義者＝教養層のことばという位相差は明治期にも通用する。出版者の方針次第で『唐詩選国字解』異本のようにダとジャが書き換えられる事例を、篤胤講本の異本にも考慮すべきといえよう。さて、数多くの異本がある『西籍慨論』は諸本の成立背景の確

認が不可欠である。次章では、中川（二〇〇五）に依拠し、明治刊本までに『西籍慨論』に如何なる本が広まっていたのか整理する。⁽¹⁶⁾

三・『西籍慨論』の成立及び流布について

『西籍慨論』には自筆稿本が残存し、『漢学大意』と名付けられている。文化八年には成立していたとされている。⁽¹⁷⁾

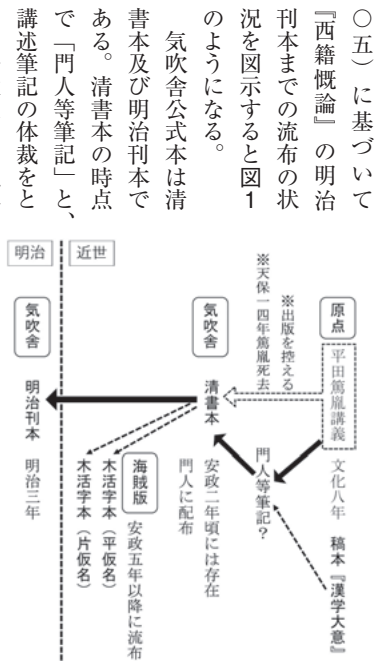
中川（二〇〇五）によると、文化一〇年の平田塾著述書目「菅能屋先生著述書目」には「西籍慨論 五巻追刻」とあることから当初、『西籍慨論』を出版する計画があったという。しかし、幕府に警戒されていたため、儒学批判を主題とする『西籍慨論』の出版は控えられたとみられる。⁽¹⁸⁾ 篤胤の没（天保一四（一八四三）年）後、門人には篤胤の著述書目が配布され、『西籍慨論』は写本（＝清書本）で頒布された。⁽¹⁹⁾

安政五（一八五八）年、平田塾の許可を得ずに木活字本が流通した。見返に「裾霞堂藏」「裾露堂藏」と書肆らしき名があるが、中川氏は実在する書肆ではないとする。吉田（二〇一二）は『氣吹舎日記』の記録から、木活字本が出版された際、それについて書肆岡田屋が平田鋳胤のもとに謝罪に来たこと、上方（河内屋嘉兵衛）でも木活字本が出版されてしまったことを明らかにする。いわば、木活字本は営利目的による海賊版だった。⁽²⁰⁾

明治維新後、鋳胤の働きにより、官許で明治三年一〇月に明治刊本の出版に至る。

以上、中川（二〇〇五）に基づいて

図 1



た木活字本は、清書本を原本としたと考えて差し支えない。中川氏は木活字本の異本を八種類挙げるが、平仮名本と片仮名本が存在する。複数回に渡って組版・流布されたことが分かる。

明治刊本は、上巻末尾の鋳胤の言で「モトハ先人ノ漢学大意ト名ヅケテ。唯少カ講説ノ覚書ニテ。後二好ク文章ヲカキ整ヘテ。西籍慨論ト為スベキ下構ヘニ。セラレタル物ナリシヲ。其事ノ成ラザル内ニ。イツトナク。今ノ如クハ成タルナリ。」（傍線は筆者による）とある。「下構へ」＝清書本として成立した『西籍慨論』をもとに刊本が作成されたとみてよいだろう。

以上を踏まえ、次章では調査資料の書誌情報と、異本の本文の系統について述べる。

表1 『西籍概論』 調査資料書誌情報 (単線・二重線の下線は稿者による)

	題名	編著者	大きさ・巻数 【巻】丁数	行数 (×字数)	本文表記	備考	所蔵	請求記号
A 自筆稿本	漢学大意 (外題)		大本3巻 【一】36丁 【一フ】45丁 【二】58丁	12～13行 10行:【一 下】24丁オ ～43丁ウ 【二】8丁ウ ～12丁ウ	漢字平仮名交じり文。 漢字は行草書体、朱 点が付けられる。朱や 墨による書き込み・ 訂正あり。一下の24 丁オ～43丁ウの漢字 は楷書体、紺点・朱 点が付けられる。朱に よる書き込み・訂正 あり。二の8丁ウ～12 丁ウも漢字は楷書体、 紺点・朱点が付けられ る。	写本 文体: 本文全体はデアル体の口 語文だが、一下の24丁オ～43丁 ウ及び二の8丁ウ～12丁ウは文 語文である。一下では、朱で文 語を口語に直してある。 体裁: 各巻に「秋田圖書館」の 型押しがしてある香色の表装が 施され、その題簽に「平田篤胤 (眞筆) / 漢学大意」と墨書され ている。また、反放紙の紙背に 記述されており、訂正・増補の 付箋が付けられている。	秋田公文書 館	貴10-1 ～3
B 清書本	① 西籍概論 講本 (内題)	平田先生 講談 門 人等筆記	半紙本4巻 【一の巻】42丁 【二の巻】48丁 【三の巻】52丁 【四の巻】40丁	10行	漢字平仮名交じり 文。朱による書き込 みがある。句点「。」 が付く。漢文に返り 点が付く。振り仮名 及び一部の語は片 仮名。朱による書き 込みがある。	写本 奥書: 此偏道大意は文化八年と いふ歳我父の三十六歳の時講説 せられたるを弟子等の筆記し者 にて其後久敷考へもせずて打捨 おかれたるにてそのまま、人に 見すへきものならずといかにこ へともゆるされざりつるをいか ていかてこひ給る人の多くをは こ、ら中清書はしつれと誠に草 稿とも草稿なる物なれば其こ、 ろして見給へと鈍胤主より一部 おくりおこされつればふたつな き【稿者注: 虫損】宝文と宋文 をさめおくるなれ 嘉永五年壬 子六月 栄樹園主羽多野敬雄	豊橋市図書 館羽田八幡 宮文庫	121.2/35 /1- 121.2 /35/4
	② 西籍概論 講本 (内題)	平田先生 講談 門 人等筆記	半紙本4巻 【一の巻】42丁 【二の巻】48丁 【三の巻】52丁 【四の巻】40丁	10行	漢字平仮名交じり 文。朱による書き込 みがある。句点「。」 が付く。漢文に返り 点が付く。振り仮名 及び一部の語は片 仮名。	写本 蔵書印: 「蔵書物主 / 西川善六」 「武酒屋 / 神學場」「西川 / 吉 介」が捺されており、いずれも 西川吉輔のものである。	岡島昭清先生 (大阪 大学) 架蔵	
C 平仮名木活字本	① 西籍論議 概本 (内題)	平田先生 講談門人 及傳聞人 等書記	大本4巻 【巻之一】48丁 【巻之二】54丁 【巻之三】58丁 【巻之四】45丁	10行×21字 (巻之一の1 丁オL4まで 22字)	漢字平仮名交じり 文。カタカナが混ざ る。濁点・句読点・ 振り仮名なし。	木活字本 一の巻見返し: 安政戊戌午春新 雕 / 西籍概論 / 呂活字百部際絶 板 / 拙齋堂蔵	関西大学図 書館所蔵	L123 100 6147- L123 100 6150
	② 西籍概論 講本 (内題)	平田先生 講談門人 及傳聞人 等筆記	大本3巻 【巻之一】48丁 【巻之二】54丁 【巻之三】58丁 (巻之四欠)	10行×21字	漢字平仮名交じり 文。片仮名が混ざ る。濁点・句読点・ 振り仮名なし。	木活字本 一の巻見返し: 安政戊戌午春新 雕 / 西籍概論 / 呂活字百部際絶 板 / 拙齋堂蔵	岡島昭清先生 (大阪 大学) 架蔵	
	③ 西籍概論 講本 (内題)	平田先生 講談門人 及傳聞人 等筆記 (巻之四は 平田先生 講談門人 及傳聞人 等書記 が異なる。	大本4巻 【巻之一】48丁 【巻之二】54丁 【巻之三】58丁 【巻之四】45丁 ※四は10丁まで 関西大学図 書館本と組版 が異なる。	10行×21 字	漢字平仮名交じり 文。片仮名が混ざ る。濁点・句読点・ 振り仮名なし。朱に よる書き込みあり。	木活字本 一の巻見返し: 安政戊戌午春新 雕 / 西籍概論 / 呂活字百部際絶 板 / 拙齋堂蔵 四の巻表紙見返し: 朱書きで 「此書は伊吹能屋大人 / 三十六 歳 / 時ニ文化八年ニ講説し給へ るを弟子たちの筆記したるもの なりとそ」と書き込まれる。 本文: 本文全体に渡る朱による書 き込みは清書本との校合である。	北海道大学 図書館	一般デジ タル 181.12/ H1
D 片仮名木活字本	① 西籍概論 (内題)	平田先生 講談門人 及傳聞人 等書記	半紙本4巻 【巻之一】42丁 【巻之二】47丁 【巻之三】51丁 【巻之四】40丁	10行×23 字	漢字片仮名交じり 文。濁点・句読点・ 振り仮名なし。	木活字本 一の巻見返し: 安政戊戌午春新 雕 / 西籍概論 / 呂活字百部際絶 板 / 拙齋堂蔵	東大教養一 高文庫	一: ち: 4
	② 西籍概論 (内題)	平田先生 講談門人 及傳聞人 等書記	半紙本4巻 【巻之一】40丁 【巻之二】45丁 【巻之三】48丁 【巻之四】38丁	11行×22 字	漢字片仮名交じり 文。濁点・句読点・ 振り仮名なし。	木活字本 一の巻見返し: 安政戊戌午春新 雕 / 西籍概論 / 呂活字百部際絶 板 / 拙齋堂蔵	蓬左文庫	8-196
E 明治刊本	西籍概論 講本 (内題)	平田先生 講談 門 人等筆記	半紙本3巻 【上之巻】序6 丁、端書1丁、 本文58丁 【中之巻】51丁 【下之巻】51丁	10行	漢字片仮名交じり 文。句点「。」が付 く。漢文に返り点が 付く。振り仮名は片 仮名。	板本 刊記なし 出版者: 但馬屋久兵衛 (印によ る) 出版年: 明治三年 (序文による)	国立国会図 書館	W23-H1 ～H3

四・調査資料と異本文の系統について

本章では、A 自筆稿本と、B 清書本二種、C 木活字の平仮名本三種、D 木活字の片仮名本二種、E 明治刊本一種の計九種を取り上げ、書誌情報及び、本文の系統関係を確認する。

四・一・調査資料の書誌情報

表1に調査資料の書誌情報を示す。注目点に下線を引いた。

A 自筆稿本『漢学大意』は、後藤（一九七八）において『佛道大意』に確認された日付の訂正のような痕跡や奥書はなく、講義ノートか定かではない。付箋による文章の増補・注記や、一下の途中に、ほかの部分より明らかに端正な表記による文語文の草稿が綴じられており、成立以後、繰り返し増補・再編成を経ていると考えられる。文語文の草稿は、発表予定だった別稿を組み込んだとみられ、B 清書本・E 明治刊本では、口語表現に置き換えた本文になっている。⁽²³⁾

夙に中川（二〇〇五）で「塗抹訂正の箇所が多いが、講釈の骨格は後の清書本や版本に同じ」（98）と述べられる通り、A 自筆稿本は気吹舎公式のB 清書本やE 明治刊本の源流といえる。

・ A 本の本文のほとんどをB 類本、E 類本が持つ。⁽²⁴⁾

・ A 本に数多くある欄外の書き込みや、一下の末尾に付されている「風流志道軒傳」⁽²⁵⁾の抜粋がB 類本・E 類本本文のしかるべき位置に挿入されている。

表2 自筆稿本・清書本・明治刊本対照表

自筆稿本の文語文に該当する範囲							
A 自筆稿本（文語）		B 清書本		E 明治刊本			
二上	八丁ウ L 1 ～ 十 三丁ウ L 9	三の巻	十丁ウ L 4 ～ 十 三丁ウ L 10	中	三十一丁ウ L 1 三十四丁ウ L 3	上	一丁オ L 3 ～ 三十 八丁ウ L 8
一下	二十二丁オ L 1 四十二丁ウ L 6	二の巻	二十七丁ウ L 10 四十八丁オ L 10	中	六丁ウ L 2 ～ 二十 三丁ウ L 9	上	一丁オ L 3 ～ 三十 八丁ウ L 8
二上	二十五丁オ L 8 三十七丁ウ L 10	三の巻	三十三丁オ L 7 五十二丁オ L 8	下	一丁オ L 3 ～ 十七 丁オ L 4	上	一丁オ L 3 ～ 三十 八丁ウ L 8
二上	三十八丁オ L 1 五十四丁オ L 12	四の巻	一丁オ L 3 ～ 二 十一丁オ L 3	下	十七丁オ L 4 ～ 三 十四丁ウ L 3	上	一丁オ L 3 ～ 三十 八丁ウ L 8
二上	一丁オ L 1 ～ 二 十五丁オ L 7	三の巻	一丁オ L 1 ～ 三 十三丁ウ L 6	中	二十三丁ウ L 9 五十一丁ウ L 9	上	一丁オ L 3 ～ 三十 八丁ウ L 8
二下	十九丁オ L 1 四十二丁ウ L 6	二の巻	二十一丁ウ L 4 四十八丁オ L 10	中	一丁オ L 1 ～ 二十 三丁ウ L 9	上	一丁オ L 3 ～ 三十 八丁ウ L 8
二下	一丁オ L 2 ～ 十 八丁ウ L 13	二の巻	一丁オ L 3 ～ 二 十一丁ウ L 2	上	三十八ウ L 9 十七丁オ L 2 十七丁オ L 3 八丁ウ平鏡胤跋文	上	一丁オ L 3 ～ 三十 八丁ウ L 8

・ A 本で墨で囲った本文をB 類本・E 類本から除いている。
以上から、B 類本・E 類本はA 本から整えた文章を持つといえる。
また、A 本、B 類本、E 類本の本文位置を対照した表2から分る通り、B 類本の四の巻二十一丁オ L 4 ～ 四十丁オ L 4、E 類本の下

卷三十四丁ウ」²⁶「五十一丁オ」に相当する本文（木活字本には存在する）がA本にはない。

B類本気吹舎頒布の写本には、羽田八幡宮文庫所蔵の清書本①及び西川吉輔旧蔵の清書本②が確認できた。両本は瓜二つで、文の配置から丁数まで同等の本文が書写されている。

C類本①②③は、いずれも同じ活字セットによる組版違いの異本である。①は巻之一の内題が「西籍論講概本」と組まれており、一丁オの四行目まで二二字で組版されているが、二丁以降はほかの木活字本と同じ組版である。巻之二、巻之三は①②③に共通して同じ組版である。②は巻之四を欠き、①と③巻之四は最初の十丁の組版がそれぞれ異なるが、十一丁以降は同じ組版である。

D類本は、①二三字×一〇行、②二二字×一一行で、組版はもとより、そもその活字セットが異なるものと考えられる。⁽²⁶⁾

E明治刊本は上中下の三巻本であり、B清書本の本文を引き継ぎ、四巻本を再構成している。

編著者に注目すると、B清書本、E明治刊本には「門人等筆記」とあるが、木活字本は「門人等」の後に二重線部「傳聞人」が活字で組み込まれ、「筆記」を「書記」とするものもある。特に「傳聞人」は、木活字本で付け加えられた文句であると推測される。

四・二・異本における本文の相違と関係

次に異本の本文にどのような違いがあるのか、A自筆稿本、B類本①②、C類本①②、D類本①②、E明治刊本の一丁オ九行目

（A本は他本の二丁オに相当する八行目まで）の本文を比較し、確認したい。次に引用する本文は、変体仮名をPam明朝で近い字体によつて文字起こしし、合字は「」で囲んだ。行移りは／で表した。注目する語句・表記に傍線及び番号を振った（A本の文字起こしについては注も参照）。

A▼自筆稿本

さて、今日より、三日¹¹の間ときま（申）に事小参、記（おきま）に／とふり、儒道の大意で、則、漢学の（ら）ま（ま）の（ら）国を、い（も）る、開闢より致して、／定⁴まれる君³めく、歴代と申⁵て、周の代⁶、秦とあり、秦の代⁷、漢と／う（り）へう（り）代つて、その、清といふ代⁸、あつたるまで、数十代の沿革、ま、儒／道と申⁹にる¹⁰、ま、其漢学致¹⁰まものを、儒者と申⁹にる¹⁰、／御国へ、漢学¹⁰、／たつてこのう、世々害と相あつたるを（の）（ら）ま（ま）／和漢の、儒者といふもの（其の）太¹¹のの学風、おとび、御国の儒者共の、／漢学の、い（う）の、相ひ¹²う、よろ（う）らざる「こと」あどを、論

B▼清書本①

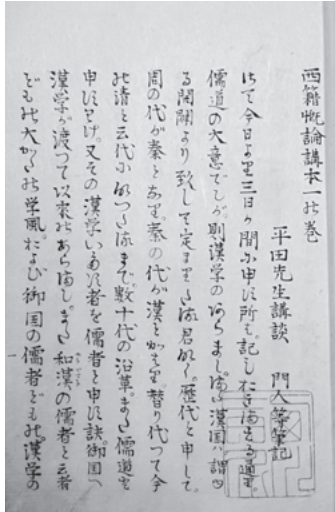
西籍概論講本一れ巻／平田先生講談 門人等筆記／て今日より三日¹¹の間ふ申に所を。記し¹たき²通²。／儒道の大意で（ら）ま（ま）則漢学の（ら）ま。／漢国³の。謂⁴の／開闢より致して定⁴ま（ま）さ（ら）ふ⁵君めく。歴代と申⁵して。／周の代⁶、秦とふ。秦の代⁷、漢と（ら）ま。替り代つて今／れ清と云代ふ（ら）ま。數十代の沿

革。まゝ儒道^⑧／申^⑨に^⑩け。又その漢学いぬ^⑪に者を儒者と申^⑫に^⑬決。御國へ／漢学^⑭う渡^⑮つて以來あらはし。まゝ和漢^{カラヤマト}の儒者と云者

▼清書本② [圖2]

西籍概論講本一れ卷／平田先生講談 門人等筆記／於て今日よゝ三日う問ふ申^①に所^②。記したき^③はる通^④。／儒道の大意で^⑤う。則漢学のあらま^⑥。はる漢國へ。謂^⑦ゆる開闢より致して定ま^⑧と^⑨は君^⑩れく。歴代と申^⑪して。／周の代^⑫う秦とふ^⑬。秦の代^⑭う漢と^⑮か^⑯ま^⑰。替り代つて今^⑱／れ清と云代^⑲ふ^⑳つと^㉑は^㉒まで。數十代の沿革。まゝ儒道^㉓／申^㉔に^㉕け。又その漢学いぬ^㉖に者を儒者と申^㉗に^㉘決。御國へ／漢学^㉙う渡^㉚つて以來あらはし。まゝ和漢^㉛の儒者と云者

図2



▼平仮名木活字本①

西籍論講概本卷之一／平田先生講談門人及傳聞人等書記／於て今

日^①をり三日う問ふ申^②に所^③を記し置^④はる通^⑤／り儒道の大意で^⑥う。則漢学のあらはし又漢國へ謂^⑦ゆる開闷を^⑧致して定^⑨はる^⑩と^⑪は君^⑫あ^⑬く歴代と申^⑭／して周の代^⑮う秦とふ^⑯ま^⑰秦の代^⑱う漢と^⑲か^⑳そ^㉑り替^㉒り／代つて今の清と云代^㉓ふ^㉔成^㉕たる^㉖は^㉗て數十代^㉘う沿革^㉙／又儒道と申^㉚ま^㉛訊^㉜又其漢學致^㉝ま^㉞者を儒者と申^㉟を^㊱決^㊲／御國へ漢學う渡^㊳つて以來の荒^㊴はし又和漢の儒者

▼平仮名木活字本②

西籍概論講本卷之一／平田先生講談門人及傳聞人等筆記／於て今日^①をり三日う問^②に申^③を所^④を記し置^⑤はる^⑥通^⑦／儒道の大意^⑧あ^⑨う。則漢學のあらはし^⑩はる^⑪漢國へ謂^⑫ゆる開闷を^⑬致して定^⑭まり^⑮とる君^⑯ふ^⑰く歴^⑱／代と申^⑲ま^⑳て周の代^㉑う秦となり秦の代^㉒う漢と^㉓か^㉔／わ替^㉕り代^㉖て今の清と云代^㉗に^㉘ふ^㉙つと^㉚は^㉛て數十^㉜／代の沿革^㉝はる^㉞儒道と申^㉟す訣御國へ漢學う渡^㊱て／以來のあらはし又和漢^㊲の儒者と云者共の大方^㊳乃

▼片仮名木活字本①

西籍概論卷之一／平田先生講談門人及傳聞人等書記／於今日ヨリ三日ノ間ニ申ス所ハ記シ置マス通り儒道ノ大意テムカ則漢學ノアラマシ又漢國ハ所謂開闷ヨリシテ定マツタ君ナク歴代ト云テ周ノ代カ秦トナリ秦ノ代カ漢トナリ替リ替ツテ今ノ清ト云代ニ成シ迄ノ數十代ノ沿革又儒道ト申ス譯又其漢學致ス者ヲ儒者ト云譯御國へ漢學カ渡リテ以來ノ荒増又和漢ノ儒者ト云者凡ノ大方ノ學風及ヒ御國ノ儒者共ノ漢學ノ致

▼片仮名木活字本②

西籍概論卷之一／平田先生講談門人及傳聞人等書記／擬今日ヨリ三日ノ間ニ申ス所ハ記シ置マス通り儒ノ道ノ大意テムルカ則チ漢學ノアラマシ又漢國ハ所ノ謂開闢ヨリシテ定マツタ君ナク歴代ト云テ周ノ代ノカ秦トナリ秦ノ代カ漢トナリ替リ替ツテ今ノ清ト云代ニ成シ迄數十代ノ沿革又儒道ト申ス譯又其漢ノ學致ス者ヲ儒者ト云譯御國ヘ漢學カ渡リテ以來ノ／荒増又和漢ノ儒者ト云者臣ノ大方ノ學風及ヒ御國ノ儒者臣ノ漢學ノ致方ノ相ヒカミ宜シカラサル事

■明治刊本

西籍概論講本上之卷／平田先生講談 門人等筆記／サテ今日ヨリ三日ガ間ニ申ス所ハ。記シオキマスル通り。儒道ノノ大意デムガ。則チ漢學ノアラマシ。マタ漢國ハ。謂ユル開闢ヨリ／致シテ定マリタル君ナク。歴代ト申シテ。周ノ代ガ秦トナリ。秦ノノ代ガ漢トカハリ。替リ代ツテ今ノ清ト云代ニ成タルマデ。數ノ十代ノ沿革。マタ儒道ト申ス。又ソノ漢學イタス者ヲ儒者ト申ス訣。御國ヘ漢學カ渡ツテ以來ノアラマシ。マタ和漢ノ儒ノ者ト云者トモノ大抵ノ學風。オヨビ御國ノ儒者トモノ。漢學

A 自筆稿本は、細かな表現もB清書本、E明治刊本とはほぼ同等の本文であることが確認できる。講説口調を活写した文章でA本は著され、その文面によって『西籍概論』諸本は成立している。

B 清書本①②は、一行の文字数、仮名の字母ですら異同がない。

気吹舎は表記さえも等価の本文をもつ清書本を頒布していたことが分かる。A本本文を整え、補訂した、親本の存在が窺われる。

E明治刊本は、B類本と比較すると仮名表記から漢字表記にした語や、振り仮名を施した箇所が多い。(8)「わけ」が、「(コト)」に改められている。しかし、B類本の本文の大概をそのまま引き継いでいる。B類本か、その親本が「下構へ」だった証左になろう。

C 片仮名木活字本①②は、B類本本文の語句とはほぼ同じであり、B類本に忠実な組版を目指していると分かる。しかし、②では(9)の一文が抜けている。「くわけ」という節が二連続しており、組版の際に飛ばしてしまったのだろう。

D 片仮名木活字本①②は、C類本よりも更に語句が変更されている。(1)連体修飾の格助詞が「ノ」に、(2)助動詞マスルは「マス」、(4)「定まりたる」は「定マツタ」、(5)「申して」は「云テ」など口語・俗語らしく直されている一方で、(7)「なつたる」は「成シ」、(10)「渡ツテ」は「渡リテ」と非促音便形である。(3)「ヨリイタシテ」は「ヨリシテ」、(6)「カハリ」は「ナリ」と、文意が変わらない程度に語句を短い表現に改める傾向がある。

D類本は四巻とも、C類本より丁数が少ない。語句を縮め、字数を少なくして丁数を節減した木活字本であると考えられる。

以上から、本文の系統は、次のように整理できる。

表3 『西籍概論』 諸本のジャ・ダの使用数

- ・A 自筆稿本三巻、E 明治刊本三巻はB 清書本の一の巻～四の巻の区分に合わせて分け、計上した。
- ・「異文」は他本にない本文を指し、「異同」は諸本に同等の本文があるが、ジャ・ダの加除がある場合を指す。ジャ・ダが別の言語表現に変更されている場合は別表に示す。
- ・「ヂャ」は「ジャ」に含めた。また、「ジャンヨtte」は「ジャンヨリテ」に含めた。
- ・自筆稿本（二）文語箇所で「なり」の箇所を朱で「ぢゃ」に訂正している箇所3例を含めた。

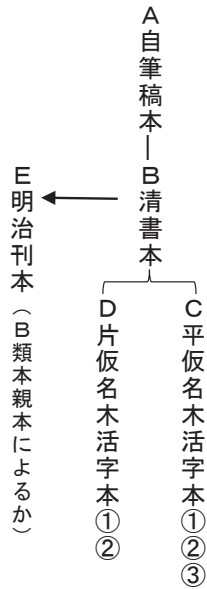
ジャ形式+ダ形式 合計	ダ形式 計	ダノ	ダモノ (ラ)	ダガ (文頭)	ダガ (文中)	ダニヨリテ (文頭)	ダニヨリテ (文中)	ダカラ ★	ダラウ ★	ダ (ト、ナド引用節中、 文末終止)	ジャ形式 計	ジャノ	ジャモノ (ラ)	ジャガ (文頭)	ジャガ (文中)	ジャンヨリテ (文頭)	ジャンヨリテ (文中)	ジャ (ト、ナド引用節中、 文末終止)		
25	2				2					23	2	1	1	4	5	10			A本	一の巻
16	1				1					15				3	2	10			A本異文	
25	20	2	1	6			3		8	5			1		2	2			B類本①②	
25	20	2	1	6			3		8	5			1		2	2			C類本①	
25	20	2	1	6			3		8	5			1		2	2			C類本②③	
※24	20	2	1	6			3		8	4					2	2			D類本①	
※23	19	2	1	6			3		7	4					2	2			D類本②	
25	25	2	1	1	6		5		10	0					1				E類本	
1	0									1									E類本異文	
32	6				3			1	1	1	26			8	5	13			A本	二の巻
6	0									6						6			A本異文	
32	8				4			1	1	2	24			7	5	12			B類本①②	
32	8				4			1	1	2	24			7	5	12			C類本①②③	
※31	8				4			1	1	2	23			7	5	11			D類本①	
※31	8				4			1	1	2	23			7	5	11			D類本②	
32	32				11		5	1	1	14	0								E類本	
61	6				4			1	1	55	5	2		11	12	25			A本	三の巻
5	1				1					4						4			A本異文	
61	8	2			5			1		53	3	2		10	12	26			B類本①②	
※60	7	1			5			1		53	3	2		10	12	26			C類本①②③	
※60	7	1			5			1		53	3	2		10	12	26			D類本①	
※59	7	1			5			1		52	3	2		10	12	25			D類本②	
61	60	5	2		15		12	1		25	1					1			E類本	
31	1				1					30	9	2			1	9			A本	四の巻
31	22	5	2		1		7		7	9	5				1	2	1		B類本①②	
31	22	5	2		1		7		7	9	5				1	2	1		C類本①③	
31	22	5	2		1		7		7	9	5				1	2	1		D類本①	
31	22	5	2		1		7		7	9	5				1	2	1		D類本②	
31	27	10	1		1	1	8		6	4		1							E類本	
29	23						1	1		21	6					6			B類本①②	四の巻残
※1	1									0									B類本①②異同	
29	23						1	1		21	6					6			C類本①③	
※2	2									0									C類本①③異同	
29	23						1	1		21	6					6			D類本①	
※2	2									0									D類本①異同	
※28	22						1	1		20	6					6			D類本②	
※2	2									0									D類本②異同	
29	20						1	1		18	9					9			E類本	

※B類本①②の四の巻残二十七丁オ「ダ」1例あり。E類本では削除されている。

※C類本①②③三の巻一丁オ「ダノ」1例なし、①③四の巻残にB類本と同様の異同及び、三十一丁ウ「ダ」1例加筆あり。

※D類本①一の巻十一丁オ「ジャガ」1例なし、三十六丁オ「ダ」1例なし、三の巻一丁オ「ダノ」1例なし、四の巻残にB類本と同様の異同及び、二十七丁ウ「ダ」1例加筆あり。

※D類本②一の巻十一丁オ「ジャガ」1例なし、三十六丁オ「ダ」1例なし、二の巻三十三丁オ「ダ」1例なし、三の巻一丁オ「ダノ」1例なし、三の巻五丁オ「ジャ」1例なし、四の巻残にB類本と同様の異同及び、二十四丁オ「ダ」1例なし、二十三丁ウ「ダ」1例加筆あり。



五・ジャ・ダの調査結果

系統を確認した『西籍慨論』諸本において、本文の言語が如何なる史的位位置にあるのか、ジャとダの調査結果を踏まえて示す。

五・一・ジャ・ダの使用傾向と変遷

『西籍慨論』は、デゴザル体である。中国史の人物・出来事を解説しながら、儒教批判を展開する。その中で、指定表現等におけるジャ・ダの大半は、中国史上の人物の発言引用内や、儒者の主張の引用、篤胤の解説・主張内（地の文）に時折出現する。

表3に、A 自筆稿本、B 類本①②、C 類本①②③、D 類本①②、E 類本の計九本のジャ・ダの使用数を示した。巻の区分はB 清書本の四巻に合わせ、四の巻はA 自筆稿本と対照可能箇所とその残りで分けてある。出現する表現は、指定表現のジャ／ダ、接続表現のジャニヨリテ・ジャニヨツテ／ダニヨリテ・ダニヨツテ（文

表4 『西籍慨論』本文一致箇所
のジャとダの使用数合計

		ジャ	ダ
A 自筆稿本	一	23	2
	二	26	6
	三	55	6
	四	30	1
	計	134	15
B 清書本	一	5	20
	二	24	8
	三	53	8
	四	9	22
	計	91	58
E 明治刊本	一	0	25
	二	0	32
	三	1	60
	四	4	27
	計	5	144
四（自筆稿本なし）			
B 清書本		6	23
E 明治刊本		9	20

表5 ジャ・ダの変遷

	A 本	B 類本	E 類本	
一	だ	だ	ダ	2
	じゃ	だ	ダ	17
	じゃ	じゃ	ダ	6
二	だ	だ	ダ	6
	じゃ	じゃ	ダ	24
	じゃ	だ	ダ	2
三	だ	だ	ダ	5
	じゃ	じゃ	ジャ	1
	じゃ	じゃ	ダ	55
四	だ	だ	ダ	1
	じゃ	だ	ダ	17
	じゃ	じゃ	ダ	9
	じゃ	だ	ジャ	4
	稿本欠	だ	ダ	20
		じゃ	ジャ	6
		だ	ジャ	3

頭・文中）、ジャガ／ダガ（文頭・文中）、ジャモノヲ／ダモノヲ、並列表現のジャノ／ダノである。推量ダラウ、接続助詞くダカラ（表3★）は、ジャラウ、ジャカラの形式で出現することはない。表4はA 自筆稿本、B 清書本、E 明治刊本において本文が一致する箇所（C 類本、D 類本のジャとダはB 類本に倣うため省略）のジャとダの使用数合計を各巻ごとに示したものである。

表3・4によれば、いずれの本でもジャ・ダの両方が使用されているが、A 本は圧倒的にジャに偏り、B 類本はジャとダの両方が出現し、E 類本はダに占められている。A 自筆稿本はジャが基

表6 ジャ・ダに関わる表現の変更

		A本	B類本	E類本	
一	口語	でム	でム	ダガ	1
		なれども	なれども	ㄗダガ	1
		故	だから	ダカラ	1
		ぞ	だ	ダ	1
二	口語	だらう	有う	有ウ	1
			～じゃが	～ダガ	1
	稿本文語	であるから	であるから	ダカラ	1
		なり	なり	ダ	2
		なり	じゃ	ダ	1
		なり	でム	ダ	1
		あらずや	でム	ダ	1
			でム	ダ	1
三	口語	～なるが	～なるが	～ダガ	1
		ぞ	ぞ	ダ	1
		じゃの	じゃの	ナド、	1
		じゃの	じゃの		1
	稿本文語		じゃ	ダ	2
		なり	じゃ	ダ	1
		なり	でム	ダ	1
		なり	でム	デム	1
		いふべきに	じゃが	ダガ	1
		なるに	じゃに	ダニ	1
四	口語	やうな	やうだ	ヤウダ	1
		でム	でム	ダ	1
		けれども	だが	ジャガ	1
		稿本欠	だ	デム	16
			なり	ダ	1
			だ	デ	8
			だ	カ	1
			なしだ	ナイ	1

本であり、ダはダラウ、ダカラ、ダガという決まった形式に現れて出現する。中国史上の人物や儒者等に位相語としてジャ・ダを使い分けたのはなく、講説口調の一体としてジャが使用される。

B類本は総計でジャが優勢だが、一の巻、四の巻ではダが優勢であり、巻によって偏りがある。C類本とD類本では、加除があるものの、B清書本と同じくジャ・ダが出現している。近世期に流布した『西籍概論』では同位置同語のジャ・ダにおいて、改変されることなくあったことを意味する。表5はA自筆稿本、B清書本、E明治刊本でジャとダの表記がどう変更されているかを示したものである。B類本において、A本でジャだった語が一部、ダに改変されていることが分かる。これも巻によって差がある。稿者の目からはB類本でも講説中の登場人物の位相にジャ・ダの使用傾向が左右されたとは考えられなかった。稿本と、複数の門人

の講述筆記を踏まえてB類本の本文を整理し直したために、ダの使用が増加する巻があるのだと考えられる。篤胤の講説でダが用されたためか、筆記者の言葉遣いに引かれてダで書き留めたためかは定かではない。

更に、E明治刊本では、ジャの使用箇所を、ほぼすべてダに改変する。表6は、ジャ・ダが別の表現に変更される場合の数を示したものである。A本やB類本でデゴザル、文語体のナリだった箇所などは、E類本で全体に渡りダを含む表現にする編集方針が窺える。東京において教養層・庶民の双方に一般化しつつあったダを採用する意図があった可能性がある。

ところが、E類本下巻に相当する四の巻では、ダだった箇所をジャに改める例を8例確認できる。ほかにも、ダをデゴザルに改める例や、接続助詞で文を繋げる例も見られ、他の巻に比べて特異な改変傾向がみられる。

五・二・『西籍概論』明治刊本のジャ

ダへの改変傾向が顕著なE明治刊本において、下巻に集中するジャへの改変は如何なる理由によるものか。該当するジャ全14例は、E類本下巻三十三丁ウー三十五丁ウに表れる。次にその本文を示す。ジャは波線、ダは破線を引いた。また、□で囲んだ語、単線を引いた表現は注目すべき文言である。

【E】▼明治刊本 下巻 三十三丁ウー三十五丁ウ

狂レ言ヲ云ヒ放ツデ有^ラウガ。鈴屋ノ翁ノ言ル、ニハ。儒者ハ其ノ名ニ惑ツテ。名ガナケレバ其ノ事モナイト思ツテラルハ。甚^タ愚ナル^ヲジヤ。〔中略〕種々ノ名ガアル^ヲジヤガ。〔中略〕是モ漢籍渡リ來テ後ニ。御閑ニ人固ヨリ有ル^ヲジヤモ^ノヲ。〔中略〕アラ他ト云ハ義ノコトジヤニ依^テ。其ノ餘ノ閑々モ准テ知ルガヨイデム。〔中略〕返ス^ヅ愚ナル^ヲジヤト云レマシタガ。〔中略〕縣居ノ翁ノ云ハレマシタニハ。〔中略〕天地ノ行ハ。凡テ漸ニシテ至ルモノジヤ。〔中略〕信屈ナル^ヲジヤ。仍チ人ノ打聞ニハ。才覚有^テ。聞キ安ク。コトワリ安ケレドモ。サウハ行ハレザルモノジヤ。天地ナス春夏秋冬ノ。漸ナルニ背ケル故ジヤト云ハレ。又吾ガ翁ノ云ハレマスニモ。〔中略〕甚ク作り飾リタル強事デ。人ノナルベキ限リヲ過タルシワザジヤ。〔中略〕人ノ有^ルベキ限リヲ過ギテ。甚シク設ケタル強事ジヤ。然ルヲ天下後世ノ人。〔中略〕誠ニ愚ナル^ヲジヤ。〔中略〕教ノ功ダト思フハ。甚^タ愚ナル^ヲジヤ。〔中略〕教ヲ受ストモ固ヨリ誰デモヨク飛トコロジヤ。扱コノ教ヲ学ブ者ノ中ニ。

ジャが集中して使用されるのは、四角囲みした人物「鈴屋ノ翁」「吾ガ翁」＝本居宣長⁽²⁸⁾、「縣居ノ翁」＝賀茂真淵という、篤胤にとって先学の国学者の言が引用される箇所である。これは、幕末・明治初期の東京でジャが既に「博士語」「老人語」と化していたことが関係するとみられる。

金水(二〇〇三)は、西日本的な特徴を持つ役割語「博士語」

「老人語」の源流を遡り、『牛店雜談安愚楽鍋』(明治四十五年)の「數医生の不養生」において、ジャを含む西日本的な特徴をもつ言語が医者＝博士に通じる立場の人物に使用されることを示す。この上で、江戸時代の文学作品における老人の言葉に注目し、東国語的表現が広がる化政期において、老年層は上方語表現を規範的な言葉として手放さず、また、医者や学者などは言葉遣いに保守的で、古めかしい言葉遣いが目立つたであろうことから、文芸作品、演劇作品の登場人物に誇張されてジャが使用され、伝統的に「老人」＝上方風の話し方という構図が受け継がれたと指摘する⁽²⁹⁾。

つまり、明治刊本時点で、ジャは老人や知識層が使用するというステレオタイプが形成されていた。明治刊本では、あたかも篤胤が「鈴屋翁」「縣居翁」の台詞を、翁らしくジャとしたかのような演出が施されていたのである。

六・『西籍慨論』のジャとダの位置づけ

以上、ジャ・ダの調査結果から、『西籍慨論』諸本文の言葉遣いに、明らかな改変あることを示した。諸本を、言語資料として次のように位置づけできる。

A 自筆稿本『漢学大意』…『西籍慨論』諸本の源流にあたる。講説の文体の一体としてジャを基調としており、化政期の講説における言語意識が反映されていると考えられる。

B 類清書本…近世期に流布した公式の『西籍慨論』であり、自

筆稿本及び門人等筆記を踏まえて整理された本文を持つ。全体としてはジャが優勢であるものの、ダが優勢な巻も存在する。これは門人等筆記の本文が混入したためと考えられる。

C類平仮名木活字本：B類清書本をもとにした海賊版。清書本に忠実な本文を試みているものの、行を飛ばしてしまう箇所がある。ジャ・ダの使用傾向は清書本に倣うが、加除が僅かにみられる。

D類片仮名木活字本：B類清書本をもとにした海賊版（B類本にはない、C類本の加除がみられ、C類本を底本にした可能性がある）。本文の内容が変わらない程度に、語句の改変が甚だしい。ジャ・ダの使用傾向はC類本と同様である。

E類明治刊本：B類清書本の本文を引き継ぐ気吹舎公式の『西籍慨論』板本である。ジャのほとんどはダに変更しているが、老人語・博士語としてジャが使用される。そのほか、デゴザルやナリ、文の接続にB類本から変更がある。幕末・明治初期の東京の言語に引き付けて文章を整えたとみられる。

化政期の講説に焦点を当てたのであれば、自筆稿本にあたるべきといえよう。近世期に受容された講説文としては清書本が相応しい。明治刊本は、文章に繰り返し手が入っており、幕末・明治初期の言語意識が含まれることを考慮して、言語資料として扱う必要がある。

注

(1) 『「たまたすき」十之巻附録「大壑君御一代記」五丁オ（新日本古典籍総合データベース参照、書誌ID：20018220）による。

(2) 山田孝雄（一九四〇）p.183で「講釈の体」の篤胤著作に「古道大意」「俗神道大意」「歌道大意」「志都の石屋」「西籍慨論」「出定笑語」「出定笑語附録神敵二宗論」「悟道弁講本」「講本氣吹颺」等が示される。

(3) 長澤規矩也「図解和漢印刷史解説編」（図書学参考図録入門編3、汲古書院、一九七六年）p.77には、「西籍慨論講本巻一首誤植／四巻／平田（篤胤）／安政五刊（木活、摺霞堂）／巻一首・巻四首及見返 巻一の首の誤植は書名・著者にわたる。これを巻四首と比較すればよく分かる。しかし、伝本には訂正された本がかなり多い。見返の「百部印刷」という語も信用できないことと考えられるくらい、伝本が多い。」とある。

(4) 現在、『西籍慨論』本文を最も参照しやすい活字資料の『新修平田篤胤全集』第十集（名著出版、一九七七年）は明治刊本を底本とする。

(5) 「出定笑語」も明治期に気吹舎公式の板本が出版された境遇にある。

(6) 中川（二〇〇五）は門人に頒布するため制作された写本を「清書本」と呼ぶ。気吹舎自体は「清書本」という言葉は使用せず、清書をした「書写本」「写本」として頒布する（青森県史 資料編 近世 学芸関係「青森県、二〇〇四年、pp.662-667」掲載の文書四五・四六、四九・五四による）。本稿では、手書きの書物一般を表す写本と、気吹舎が頒布した写本を区別するため、中川（二〇〇五）に倣って「清書本」という用語を使用する。

(7) 後藤（一九七八）p.146に「俗神道大意（巫學談弊）」「歌道大意（歌道大意）」「西籍慨論（漢学大意）」「志津能石室（醫道大意）」

「出定笑語(佛道大意)」 「出定笑語附録(二宗論)」 「悟道辨(悟道談弊)」 「玉たすき(玉たすき)」 の自筆稿本(丸括弧内の書名) が秋田県立秋田図書館所蔵であることが記されている(現在は秋田公文書館所蔵)。

- (8) 安道(一九九六)における調査は『新修平田篤胤全集』(名著出版)によつたとみられる。

- (9) 安道(一九九六) p.161 に『歌道大意』序に清書をした人物として「角田忠行」と名が記されており、「信濃佐久郡」出身であることが明らかにされる。

- (10) 筆録者によつて、講本のジャ・ダの使用数に違いがあることは、崎門派門人筆録を調査した金田(一九八〇)にも指摘される。また、金田(一九八四)によれば、稲葉黙齋講述『中庸筆記』(講義年・筆録編纂年は寛政元年)は上総の教養層・知識人が筆録者であり、筆録者によつてダとジャの使用量が異なるという。

- (11) 浅川(二〇一三)によれば、千葉芸閣『唐詩選講釈』(寛政二年)から小林高英『唐詩選広解』(文化元年刊)への改訂や、稲葉黙齋『孝経判誤』(寛政五年写あり)の書写時点にもみられる傾向であるという。

- (12) 小田切(一九四三)では、明和期の洒落本と断本を資料に、全体としてはダの使用が多いが、ダは下層の人々、ジャが西国系統の商人や武士を含むほか、上流階級の人々に使用されるという位相差があるとする。滑稽本『浮世風呂』においても、小松(一九八四)により「チャ」の使用者は武家・上層・教養層の人間が多かったようである」(p.112)と述べられている。

- (13) 前田(一九九二)では、明和・安永期の断本ではダが優勢でジャの使用率は低いが、化政期にダの使用率が上がり、下級・上流階級の人々に区別されなくなると述べる。寺田(一九九六)も断本を調査資料とし、幕末におけるダの使用層の増加と、劣勢語であるジャ

がやはり聞き手より上の立場の話者が使用することを指摘する。

- (14) 小松(一九八四) p.283-284 によると、明和期には、上方語と江戸語の特徴を併せ持つ江戸共通語が形成されていたと考えられる。

- (15) 木坂(一九八八)による明治初期の講述本『交易問答』(加藤弘蔵、明治二年)『真政大意』(加藤弘之、明治三年)『民権自由論』(植木枝盛、明治二年)の調査や、佐久間(一九九五)の神道系講釈の調査においても、資料差はあるもののジャが出現することが分かつている。

- (16) 篤胤講本の受容と流通については吉田(二〇一二)に詳しい。

- (17) (一)と同資料五丁ウに文化八年の篤胤事績として「春ヨリ始メテ、○古道大意、○俗神道大意、○漢學大意、○佛道大意、○醫道大意、○歌道大意、○玉多須喜、等ノ講本次々成レリ。」とある。

- (18) 中川(二〇〇五) p.86 によると、篤胤は文政三年、天保二年などに儒学批判のかどで幕府から尋問を受け、天保一年には『大扶桑国考』の絶版と板木没収が江戸町奉行から命ぜられている。

- (19) 吉田(二〇一二) p.334-335 によると、安政期のもととみられる気吹屋の著作の値段表に「西籍概論聞書」がリストアップされている。門人らはそのリストをもとに清書本を手に入れていたという。

- (20) 吉田(二〇一二) p.338

- (21) 調査資料のほかに、新日本古典籍総合目録データベースに登録されており、かつ画像が公開されている「西籍概論」の系統を示す。D類①と同系は東京学芸大学附属図書館望月文庫本(書誌ID: 100217485)、D類②と同系は東京学芸大学附属図書館望月文庫本(書誌ID: 100346897)、祐徳稲荷神社中川文庫 6/1/123 本(書誌ID: 100224864)、祐徳稲荷神社中川文庫 6/1/118 本(書誌ID: 100304512、100224954)、E明治刊本と同版は東北大学附属図書館和算資料藤原文庫 3809 本(書誌ID: 100237947)、南丹市立文化博物館小出文庫 9 本(書誌ID: 100109236)、大洲市立図書館矢野玄道文

庫23-168本（書誌ID：100217485）。

- (22) 調査資料のうち、A本、B②、C①②は所蔵元で実物・写真を確認した。B①、D①②は所蔵元からモノクロの紙焼き複写を取り寄せた。C③は新日本古典籍総合目録データベース（書誌ID：100261183）、E明治刊本は国立国会図書館デジタルコレクションで参照した。

- (23) また、A自筆稿本文には「玉の真柱に申たることく」（一の十丁ウ）と、文化一〇年に出版される「霊の真柱」が登場する。「玉の真柱」の存在が周知され、参照できる時点でないといえない語りがA本時点で含まれている。

- (24) 自筆稿本から清書本・明治刊本に採用されていない本文は数多いので留め置き、清書本・明治刊本において、大幅な増補や、整理のあった文章の範囲を示す。清書本に加えられている本文は、一の巻「丁オ」10「其は」～「三丁ウ」12「また」、四丁ウ14「さう」～「五丁オ」19「ふん」、十九丁ウ14「但」～「16」16「ふん」が存する。自筆稿本と文章内容の不一致がある箇所には、一の巻十九丁ウ「扱」～「二十丁オ」2「ふん」、二十六丁オ「抑」～「二十八丁オ」1「たるが」、一の巻三丁オ14「なほ」～「110」16「ふん」が存する。明治刊本は、以上の清書本における増補等を引き継いでいるが、清書本にない大幅な文章の増補箇所がある。上巻巻末に「西籍概論」の成立・出版の経緯及び、「西籍」の名を「漢籍」の意味で使用する意図について鍔風の説明が付く。もう一つ、上巻の二十二丁ウ「世」人「～二十三丁ウ」ナレバ」までに、漢学者批判が加えられている。清書本巻之一では二十五丁ウ「世」人「～二十六丁ウ」1「なれば」に該当する。

- (25) 滑稽本、風来山人著、宝暦二二（一七六三）年刊。

- (26) 中川（二〇〇五）p80によると、本稿で調査資料としたC類本とD類本のはかに、編著者に「平田先生講談伝聞人等書記」とあるも

のや、各巻丁数が異なるものが存在する。ただし、今回の調査結果からして、木活字本の言語資料としての性格は明らかであると考えらる。

- (27) A本は、朱の「」を組み込み、原文の訂正線を施し、傍記されている挿入語句はへんに囲んで示した。欄外の書き込みは除外した。

- (28) 引用した箇所直後に、「此ノ二翁ノ説ヲ。ヨク考、通シテ。」（三十五丁ウ）とあり、二名の説を引用したことを伝える。

- (29) 金水（二〇〇三）pp.23-27

〔参考文献〕

浅川哲也（二〇〇八）『唐詩選講釈』と『唐詩選広解』の指定表現について―近世口語体資料としての再評価―『近代語研究』一四集、

近代語学会、武蔵野書院、pp.153-172

（二〇一）『稲葉黙斎「孝経刊誤」講義筆録にある改訂箇所
の性格について―崎門派の講義筆録は講義の実態を反映している
のか―』『近代語研究』一六集、近代語学会、武蔵野書院、pp.69-
85

（二〇一三）『漢籍国字解』『唐詩選国字解』とその異本 服部
南郭は『唐詩選国字解』の講述者ではない―『近代語研究』一七
集、近代語学会、武蔵野書院、pp.201-225

安道里巳（一九九六）『近世後期教養層における指定辞チャとター平田
篤風の講本を資料として―』『大分大学国語の研究』二三号、pp.11-
20

小田切良知（一九四三a）『明和期江戸語について（一）―その上の方
傾向の衰退―』『国語と国文学』二〇巻八号、pp.48-58

（一九四三b）『明和期江戸語について（二）―その上の方
傾向の衰退―』『国語と国文学』二〇巻九号、pp.40-57

金田 弘（一九八〇）『漢籍国字解とその言語―江戸崎門学派の講義筆記を中心に―』『国語学』一一三集、pp.35-46

（一九八四）『後期江戸語教養層の言語資料「中庸筆記」をめぐる』平山輝男博士古稀記念会『現代方言学の課題 第三巻 史的研究篇』明治書院、pp.259-298

金水 敏（二〇〇三）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』くもっと知りたい！日本語 岩波書店

木坂 基（一九八八）第二章 幕末明治初期講述本の文章史的性格 第三節 篤胤講述本「悟道辨」「古道大意」の文章「近代文章成立の諸相」和泉書院、pp.73-96 収録

（一九八八b）第二章 幕末明治初期講述本の文章史的性格 第四節 篤胤講述本「悟道辨」と明治初期講述本「真政大意」の文章「近代文章成立の諸相」和泉書院、pp.97-111 収録

後藤 剛（一九七七）『平田篤胤の講説筆記表現様式―「志都能石屋」を中心として―』『目白学園女子短期大学研究紀要』一四号、pp.168-158

（一九七八）『平田篤胤の「デアリマス」について』『目白学園女子短期大学研究紀要』一五号、pp.146-133

小松寿雄（一九八四）『江戸時代の国語 江戸語』国語学叢書七、東京堂出版

佐久間俊輔（一九九五）『明治初年の神道系講釈における指定辞』『国語研究』五八号、pp.33-47

寺島浩子（一九七〇）『近世後期上方語における指定の「じや」』『近代語研究』六集、武蔵野書院、pp.591-622

寺田洋枝（一九九六）『江戸語における断定の助動詞「ダ」と「ジャ」―江戸後期断本を資料として―』『国学院雑誌』九七巻七号、pp.24-40

中川和明（二〇〇五）『平田篤胤の『西籍慨論』の形成と刊行』日本宗

教文化史研究」九巻一号、日本宗教文化史学会、pp.84-96

前田桂子（一九九二）『江戸断本の指定の助動詞「ダ」と「ジャ」』『筑紫語学研究』三号、pp.16-26

山田孝雄（一九四〇）『平田篤胤』宝文館、
<https://dlndi.go.jp/infondijp/pid/1913588>

吉田麻子（二〇一一）『知の共鳴 平田篤胤をめぐる書物の社会史』ぺりかん社

〔参考サイト〕

秋田県公文書館デジタルアーカイブ

<http://daapl.pref.akita.jp/koubun/>

国文学研究資料館新日本古典籍総合目録データベース

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/?ln=ja>

国立国会図書館デジタルコレクション <http://dlndi.go.jp/>

〔付記〕

資料の閲覧・撮影をご許可下さった秋田県立図書館、関西大学付属図書館、岡島昭浩先生に記して感謝申し上げます。

（いちじ・えい 本学助教）